

# 常盤平団地 2DK生活

松戸市立博物館の展示をめぐって

**千** 葉県松戸市は、戦後住宅都市として大きな変貌を遂げた都市です。15年前、この松戸市立博物館の計画段階において、「現代の松戸の歴史をひとつの核として取り上げよう。」ということになり、昭和30年代に入居がはじまり、松戸の変貌をもたらせた常盤平団地となったのです。団地なら首都圏や関西圏にもたくさんありますが、博物館として取り上げているところはあまりありません。ふつうは展示建物も農家や町家であり、手作りの農具や生活用具なのですが、ここでは団地の住戸であり、40年前の家電や家具、台所用品など大量生産の工業



2DKの若い夫婦の生活をリアルに再現

製品です。また、当時は社会的にもそんなに関心が高くない、歴史としても新しいすぎないかとの議論もありましたが、個性的な地域の博物館をめざして実現が図られたのです。しかし、開館後しばらくして、昭和という時代が注目され、団地にも郷愁と関心が寄せられるようになり、取材も増え、ある種社会現象にもなっており、多くの来館者を迎えることになりました。

常盤平の団地を代表するものとして、当時の住宅公団が提唱した2DKの生活の再現を図ることになりました。そして、2DKを建築として捉えるのではなく、生活として捉え展示するということが、当時憧れであった団地族の生活、つまり洋風化と電化をテーマとした生活を少し強調して展示しています。ダイニングキッチンにはもちろん、畳の部屋にじゅうたんを敷き、ソファークッションを置き、三種の神器だけでなく、サイドボードやステレオ、電気掃除機までとフルに充実させました。当時の常盤平団地の住民は、ほとんどが東京都心に通う一



主婦の負担を軽減したキッチン

の神器だけでなく、サイドボードやステレオ、電気掃除機までとフルに充実させました。当時の常盤平団地の住民は、ほとんどが東京都心に通う一

流会社のサラリーマン層で、公団の厳しい入居資格をクリアした方々です。そういう意味でも、戦前に比べて劇的に変貌した松戸の姿を象徴しているといえるでしょう。

この展示は戦後の暮らしの代表例として、小学校の副読本とか大学検定試験の問題にも登場しています。また常盤平団地全体を見ても、公団として理想的な団地をめざした設計で、外部空間も40年を経たいま、すばらしい緑・芝地・公園となり、全国的にも評価されるケヤキ並木サクラ並木として育ち、当時モデルとされた北欧の住宅団地にも劣らない美しい景観と評価されています。



松の緑が色濃い 現在の常盤平団地

そのひとつは建物の老朽化であり、住み続けておられる方々の高齢化です。当然少しずつ世代の交代もあるものの、30年40年と時間をかけて熟成させてきたコミュニティを崩壊させないで、どう持続させていくのか、孤独死というこれまで予期し得なかった事態も起こりつつあり、常盤平の持つ課題は深くかつ大きいといわねばなりません。



青木 俊也  
あおき としや  
松戸市立博物館学芸員  
(日本民俗学)

松戸市立博物館  
開館時間：9:30 - 17:00(入館は16:30まで)  
休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)、第4金曜日・年末年始  
交通：新京成線八柱駅またはJR武蔵野線新八柱駅から徒歩約15分(バス便もあり)  
URL：http://www2.city.matsudo.chiba.jp/m\_muse/

室内展示写真 上2点 提供：松戸市立博物館

## それぞれの公団生活 鮮やかな心象風景

### 胸がキュンとなる僕のふるさと

大阪府藤井寺市 春日丘団地

**父** は新聞記者でした。大阪本社に勤めていたので、小学生の頃、南の郊外藤井寺球場のすぐ前の公団春日丘団地に住み、少し余裕ができたのか、同じ団地の広い間取りの部屋に移り、父が九州の小倉の読売新聞西部本社に転勤になったので、その社宅アパートに移り、また大阪に戻って、こんどは狭山市金剛団地のRC造の戸建住宅に移りました。少しずつ広く、団地から戸建へと、絵に描いたような戦後の市民の住まいの変遷でした。父は朝刊夕刊それぞれの締め切りのある仕事なので生活は不規則、育児はもっぱら母に任せっきりでした。

大声を張り上げて歩きました。それを母が3階から見ていたんです、お前は変わってる、はやく直しなさいといわれまいたね。家でピアノを弾くのもまわりに気を使いながらで大変でした。ある時、いただきもののが大きなチョコレートをお母さんが包丁で割って、1階の独身のお兄ちゃんにあげてきなさいと言われ、落とさぬようにソロソロりと階段を降りたのですが、なぜかつんのめってしまっただ怪我をしたのを覚えています。団地には様々な家族が住んでいて、僕は1階の老夫婦に孫のように可愛がられたり、上の階のお兄ちゃんにキヤッチボールしてもらったりしました。そんな思い出がギッシリ詰まっていますから、どこの団地を見ても胸がキュンとなりますね。以前「あすか」という朝

前に建てられた都心のピンテージマンションです。外国人向け仕様で、気持ちよくすぐられるよさがあります。場所も静かで、直し直して愛着もできて、少しお尻に根が生えてきたようです。



左：春日丘団地1号棟 右：藤井寺球場跡地



団地は建替工事が進捗中

住まいも所有から利用へといわれはじめていますが、それが健全です。暮らし方は5年くらいで変わってくるし、子どもも成長する、離れるときもやってきますからね。東雲のCODAN、いいですね。玄関など少し外から見えるようになっていてその家の暮らしがわかる、人の声も聞こえるし料理の匂いも洩れてくる、そういうところが魅力ですね。プライバシーがむき出しになるのも困りますが、全く見えないのもいけない、それにその時々、身の丈にあったもの、ほどほど感というのはいくらもありません。昔の公団の団地にはそれがバラバラとよくあったと思えます。団地に住んだあの時期はほん

春日丘団地の頃はサンダーボードごっこが流行っていて、団地が秘密基地で、球場が外の惑星という設定でした。子どもにとって団地はそれこそ小さな国パチカンです。団地をでてピアノを習いに行くのは大冒険でした。夕暮れに帰ってくると母が作ってくれた楽譜入れの大きな手提げが地面に擦れて建物に反響するんです。僕はすくく空想癖のある子どもだったので、誰か隠れてるゾと怖くなって



3階の右の部屋が当時の大江さんの住戸

東京に来てからはその時々合った賃貸に住んで20回ほど引越しました。いまは東京オリンピックの



春日丘団地1号棟は今も健在

の時期はほん



大江 千里  
おおえ せんり  
シンガーソングライター  
俳優

1960年 大阪府生まれ  
1983年 アルバム『WAKUWAKU』シングル『ワビーぬぎずて』でEPIC / SONY RECORDよりデビュー  
以後、シンガーソングライターとしての活動のみならず、ドラマ・映画の出演や小説・エッセイ集の出版など幅広いジャンルで活躍中  
主な著書に『僕の家(角川書店)がある

とうに心が豊かだったんだな、僕の精神の基礎はあの時の人間関係からもらったのだなと思います。いまでも、千里さん覚えてない？よく自転車で乗っけてもらって、「ああケンちゃん、中野のケンちゃんでしょ」といったことがあります。濃密な人間関係も含めて、団地はいつでも僕のふるさとですね。(談)